

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 25 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530656

研究課題名（和文）ママ友という対人関係についての探索的研究：動機づけ、構造、悩みの分析

研究課題名（英文）Study on Mum-friends: Motivation, structure and their conflicts

研究代表者

中山 満子 (NAKAYAMA MICHIKO)

奈良女子大学・文学部・教授

研究者番号：30235692

研究成果の概要（和文）：ママ友関係について調査検討を行った。ママ友への役割期待では、自律性、類似性、支援性の因子が得られた。特に支援性への期待が高く、女子大生の友人関係と似ていることも示唆された。同時に自律性への期待が女子大生より有意に高いことも特徴であった。悩みの類型では、子ども関連群、ママ友パーソナリティ関連群、多様群が得られ、この類型により関係のとらえ方傾向、対処方略に差異が認められた。

研究成果の概要（英文）：We studied on friendship between mothers rearing little children (i.e., mum-friend). As for expectation for the role of mum-friends, three factors were obtained, that is autonomy, similarity and support. Expectation for support was highest of them and it was suggested that mum-friendship was similar to friendship between female high school students. Moreover, it was found that expectation for autonomy was significantly higher in mum-friend than in female students. We also found three types of interpersonal conflicts between mum-friends; that is, conflicts concerning with their children, conflicts concerning with friends' personality and conflicts by various causes. The types of conflicts yielded the difference of attitude to friends and coping strategies for conflicts.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2990,000

研究分野：社会心理学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：友人関係、対人葛藤、母親、成人、対人関係、対処方略

1. 研究開始当初の背景

子どもを通して付き合いのある母親同士の友人関係を「ママ友」と言う。今日、インターネット上の掲示板には「ママ友が出来ません」「どうしたらママ友が出来るでしょう」などと言った質問、また「ママ友との関係に

悩んでいます」と言った相談が多く書き込まれている。就学前までくらいの子どもの持つ母親にとって、ママ友関係は重要な対人関係のひとつになっている。ママ友は、通常の友人関係と異なり、母親同士の気が合うとか同じ趣味・嗜好を持つといったことよりも、子

ども同士の関係が第一義的にあって成立している関係であって、しかも「友人関係」とみなされる特異な人間関係であり、成人期における友人関係の一形態とみなすことができる。

友人関係については、児童期、青年期の研究は非常に数多く見られるが、成人期以降の友人関係を対象とした研究は少ない。長沼・落合（1998）、岡田（2005）などでは、青年期の友人関係について詳しく分析している。岡田は大学生の友人関係への動機づけについて分析し、「外的」「取り入れ」「同一化」「内発」の4要因をあげている。しかしママ友への動機づけは、これらと共通する部分もあれば、「子どものため」などの特有のものもあることが予想される。

また上述のように、ママ友関係の成立と維持は子どもを媒介としているために、他の友人関係とは異なる特徴や構造を持ち、それゆえの悩みも生じると考えられる。また、ママ友が欲しいのに作れず孤立感を抱いている母親、あるいは自分ではママ友関係への動機づけは高くないにもかかわらず、様々な心理的・社会的圧力によって作らないといけないという思いから葛藤に苦しむ母親も多いと思われる。

母親を対象とした研究としては、育児サポートや育児不安についての研究は、非常に多く行なわれている（例えば藤本ら、2003）。また近年では、インターネット上の育児ネットワークの影響についても研究が行なわれている（徳田・伊藤、2004）。しかしこれらの研究では、サポートという側面に注目されており、ママ友関係そのものについては検討されていない。

2. 研究の目的

このような背景から本研究は、ママ友関係への動機といくつかの個人特性の検討、ママ友への期待に関する検討、ママ友関係の悩みのタイプの検討というサブテーマから構成される。

ママ友関係への動機と個人特性の検討では、まず動機づけにおける自己決定理論を参考に、ママ友への動機づけ尺度を作成し、パーソナリティや幸福感との関連について検討することを目的とする。

ママ友への期待については、その特徴を明らかにするとともに青年期の友人関係における役割行動期待との比較検討も行う。

ママ友関係の悩みのタイプでは、ママ友関係にまつわる悩みやトラブル（以下、対人葛藤）の個人差に着目し、それらの対人葛藤経験の類型化を試み、友人関係への考え方や自己関連付け傾向との関連を検討することを目的とする。また対人葛藤に対する対処方略との関連も検討する。

3. 研究の方法

次項で述べるように、主として質問紙調査を行い、ママ友という対人関係の特徴について数量的な分析を行い、考察した。

4. 研究成果

(1) ママ友関係の動機と個人特性の関連の検討

①平成22年9月に調査会社に委託して郵送調査を実施し、25歳から45歳までの成人男女222名から回答を得た。回答者のうちわけは男性81名（平均年齢38.0歳）、女性141名（平均年齢37.8歳）であった。

②一般的な友人関係に対する動機についての質問の後、もっとも親しい同性の友人（以下友人A）を一人想定してもらい、自己開示状況、サポートへの希求、知覚されたサポート、主観的幸福感について尋ねた。子どものいる女性についてはママ友を想定してもらうよう指示した。

③友人関係動機については、内発傾向と外発傾向の2因子が得られた。自己開示状況、サポート希求、サポート知覚はそれぞれ平均値を尺度得点とした。主観的幸福感には1因子構造を採用し、平均値を尺度得点とした。

対象者を、男性、女性（ママ友を想定）、女性（ママ友以外を想定）の3つのカテゴリーに分けて、変数の比較を行った。動機では内発傾向に有意差がみられ $F(2, 219) = 6.35, p < 0.01$ 、男性よりも女性で動機の内発傾向が高いことが示された。ママ友とママ友以外では差は見られなかった。友人関係のあり方では、開示状況、サポート希求、サポート知覚にもそれぞれ有意差がみられた[順に $F(2, 219) = 13.62, p < .01$; $F(2, 219) = 6.62, p < .01$; $F(2, 219) = 6.88, p < .01$]。開示状況とサポート知覚では性差が有意であった。サポート希求では男性と女性（ママ友）のみ有意であり、男性と女性（ママ友以外）の差は有意ではなく、女性のママ友関係におけるサポート希求の高さが特徴と言える。

友人関係と主観的幸福感については、全体としては動機の内発傾向、サポート希求、サポート知覚、開示状況とそれぞれ弱い相関がみられるにとどまったが、ママ友を想定した女性で子どもが未就学の場合のみ、外発傾向と有意な負の相関 $(r = -.33)$ が認められ、また男性については、幸福感は友人関係とは全く関連を持たないことが示された。

④友人関係を持ちたいという動機と友人関係のあり方とは関連があると予想される。本研究ではママ友以外を想定した女性において動機の外発傾向が強い場合、すなわち友達がいなくて恥ずかしい、あるいは友達がいなくて思われたくないという思いの強い人の場合、サポート希求・サポート知覚が減じら

れるという結果が得られた。またサポート源であり自己開示出来る友人を持つことは精神的健康につながると予想される。本研究でもサポート知覚や開示状況は主観的幸福感には関連がみられたが、弱いものにとどまった。

また小さい子どもをもつ女性のママ友関係においては、動機の外発傾向が強い場合、主観的幸福感が低いという負の相関がみられた。成人期の友人関係においては、楽しい、面白い、気があうといった理由からだけでなく、友達がいないと思われたくないなどの外発的な要因で友人関係が構築される場合もあり、その場合には友人関係がもたらす効用が減じられる可能性が示唆された。

(2) ママ友関係への期待に関する検討1

①平成21年7月上旬に、近畿圏の3つの幼稚園に依頼した。自宅で記入した後幼稚園を通して回収した。410名に配布し311名から回答を得た(回収率75.9%)。回答に不備のあるものを除き、304名分を分析対象とした。回答者の平均年齢35.9歳(Range 24-46)、専業主婦(85.9%)、有職者(14.1%)であった。
 ②まず下斗米(2000)にならば、実際の対人関係を取り出すためにママ友を具体的に1人思い浮かべることができることを求めた。また想定したママ友の親密度、役割行動期待33項目(下斗米、2000)を尋ねた。想定した相手との現在の関係満足度、要求に対する満足度、どの程度重要視しているか、どの程度関係を持続したいか、子どもが大きくなっても付き合いたいのかについても尋ねた。
 ③調査の結果、役割行動期待尺度(-4から+4の両極9点尺度)を因子分析したところ、第1因子「自律性」、第2因子「類似性」、第3因子「支援性」因子の3因子が得られた。それぞれの因子負荷の高い4項目ずつを選び、因子を代表させることとし、4項目の平均を各因子の得点とした。役割期待の下位尺度の平均値は、自律性1.47、類似性0.99、支援性2.12であり、分散分析の結果それぞれの間に有意差がみられた[F(2, 606) = 120.0, p < 0.01]。ママ友に対してもっとも期待される役割は支援性であることが示された。

主要変数間の相関係数を表1に示す。下位尺度のうち総合満足度に最も高い相関があるのは支援性であり、親密度との相関も比較的高いことが示された。

表1 相関係数

	自律性	類似性	支援性	総合満足度	親密度
自律性	-				
類似性	.581**	-			
支援性	.579**	.507**	-		
総合満足度	.238**	.254**	.453**	-	
親密度	.234**	.391**	.394**	.588**	-

(3) ママ友への割期に関する検討2

①平成21年8月中旬に、インターネット調査会社に委託し、web調査を実施した。被調査者は幼稚園に通う子どもを持つ母親とし、200名から回答を得た。回答者の平均年齢35.7歳(Range 23-47)、専業主婦(83.5%)、有職者(16.5%)であった。

②まずママ友とのつきあい方(防衛的-開示的)を尋ね、次に親しいママ友を一人(ママ友A)、それ以外のママ友(ママ友B)を一人想定させ、その相手との親密度を回答させた。さらに前述の研究で得られた役割行動期待の3因子(自律性、類似性、支援性)それぞれ4項目ずつ計12項目を用いた。また想定した相手との現在の関係満足度、重要度、継続意向、ママ友の数の回答を求めた。

③ママ友A、ママ友Bそれぞれへの役割行動期待について因子分析を行なったところ、ほぼ想定どおりの3因子が得られたので、各因子4項目の平均値を合成得点とした。ママ友Aとママ友Bで親密度を比較したところ有意差が認められ、親密度の異なる二人のママ友が想定されていたことが確認された。

次に役割行動期待の下位尺度、評価変数の平均値を比較した。関係満足度以外は、ママ友Aとママ友Bの間で有意差がみられ、いずれもママ友Aの方が得点が高かった(表2)。

表2 役割行動期待の下位尺度、評価変数の平均値

	自律性	類似性	支援性	関係満足度	重要度	継続意向
ママ友A	1.32	0.58	1.33	4.96	4.92	5.27
ママ友B	0.88	0.12	0.82	4.88	4.62	4.69

表3 つきあい方と役割行動期待の相関係数

	自律性	類似性	支援性
ママ友A			
防衛的	.103	.042	-.171*
全方的	.194**	.127	.283**
ママ友B			
防衛的	-.130	-.109	-.234**
全方的	.254**	.146*	.357**

役割行動期待について親密度(ママ友A/ママ友B)×下位尺度得点(自律性/類似性/支援性)の2要因分散分析を行なったところ、親密度と下位尺度の主効果がそれぞれ有意であり、ママ友Aの方がママ友Bよりも得点が高く[F(1, 199) = 31.14, p < .01]、自律性と支援性が類似性よりも高いこと[F(2, 398) = 63.09, p < .01]が示された。

ママ友とのつきあい方と役割行動期待との相関係数を表3に示す。防衛的つきあい方と支援性との間に負の相関が見られ、この傾

向はママ友 B でやや強い。また全方位的つきあい方と支援性、自律性には正の相関が見られた。すなわちママ友と防衛的なつきあい方をする人は相手に支援性を期待せず、誰とも仲良くしたいという全方位的なつきあい方をする人は相手に支援性と自律性を期待するということである。

表 4 継続意向を目的変数とした重回帰分析 (数値は標準偏回帰係数)

	ママ友A	ママ友B
自律性	.241 **	-.116
類似性	-.003	.164 *
支援性	.287 **	.504 **
防衛	-.285 **	-.196 **
全方位的	.135 *	.034
ママ友の数	.028	.100 +
R ²	.380	.430

+p<.1 *p<.05 **p<.01

次に継続意向を目的変数とし、役割期待、つきあい方、ママ友の数を説明変数とした重回帰分析 (強制投入) を行なった。最も親しいママ友 A については、自律性と支援性を期待する相手と関係を継続したいという意向をもつことが示されている。一方ママ友 B では支援性への期待の影響が非常に大きい。また防衛的態度は継続意向に負の影響を与えることも示された (表 4)。

(4) ママ友への期待についての検討 3

①平成 21 年 10 月下旬に関西の女子大学において講義内で質問紙を配布し、回答は任意であることを説明した後記入を求めた。115 名からの回答を得、回答者の平均年齢は 20.2 歳 (Range19-28, SD = 1.4) であった。
 ②友人とのつきあい方(防衛的-全方位的)の 2 因子を仮定して 9 項目の質問を設けた。またもっとも親しい友人を想定し、それぞれについて役割行動期待 33 項目と関係満足度・継続意向を問う項目 3 項目を設けた。
 ③ママ友への役割期待 3 因子の平均得点と比較した。支援性、自律性、類似性の順に期待が高いことは共通している。また期待得点を項目ごとにみた場合も、両者とももっとも得点が高いのは「何でも気楽に話してくれる」「苦しい立場の時、味方になってくれる」「私が困った時、知恵やものを貸してくれる」も共通して高いことが明らかになった。

一方、両者の差異に着目すると、全体にママ友に対する期待の方が高く、特に自律性、類似性でその差が大きい。項目ごとに比較すると、「他人にむやみな負担を与えない」「自分勝手な振る舞いを慎む」など対人関係にお

ける自律性に関する項目、「似たような考え方や感じ方をする」「同じものを同じように感じる事が出来る」などの価値の類似性でママ友の方が女子大生よりも期待が高いことが特徴的であった。

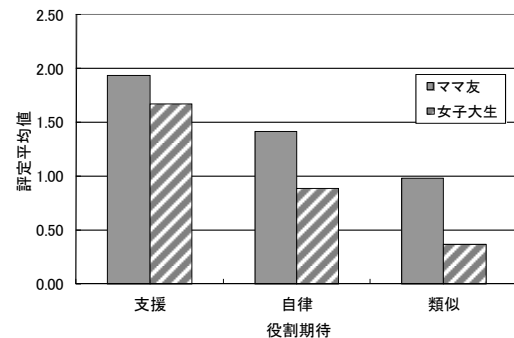


図 1 ママ友と女子大生の比較

(5) ママ友関係の悩みの類型

①平成 23 年 4~5 月に、関西の 4 つの幼稚園の協力を得て、園児の母親を対象に調査を行った。幼稚園を通して調査用紙の配布・回収を行った。288 名からの有効回答を得た。平均年齢は 36.7 歳 (SD=4.2) であった。

②ママ友関係への考え方、ソーシャルサポートの知覚、自己関連付け傾向について尋ねた。またママ友づきあいにおける対人葛藤で最近経験した事柄について多重回答方式で該当するものに○をつけることを求めた (例：子ども同士の仲が悪い、教育方針が違う、金銭感覚が違う)。さらに対人葛藤を経験した時の対処方略について尋ねた。

③ママ友関係への考え方については、因子分析の結果「防衛的」「全方位的」の 2 因子を採用した。ソーシャルサポートの知覚と自己関連付け傾向については、因子分析の結果それぞれ 1 因子構造が確認された。対処方略については、因子分析の結果 3 因子を採用した (ポジティブ、ネガティブ、解決先送り)。

また経験された対人葛藤について類型化を試みる目的で、クラスター分析を行った。それぞれの項目が回答されているかどうかで 2 値のカテゴリーとした。一つも回答のなかった 79 名を除き、209 名を対象として探索的にクラスター数を変えて分析を試み、解釈可能性から 3 クラスターを採用した。第 1 クラスターは「子どものしつけができていない」「教育方針が違う」などの回答が多いことから「子ども関連トラブル群」とした (N=101)。第 2 クラスターは「自分の子どもさえよければいいと思っている」「あることないこと他人のうわさを流す」などの回答が多いことから「ママ友パーソナリティ関連トラブル群」とした (N=67)。第 3 クラスターは多様なトラブルが回答されていたので「多様トラブル群」とした (N=41)。

クラスターを独立変数として、尺度得点を従属変数とした一要因分散分析を行った結果、ママ友関係への防衛的考え方とネガティブ対処方略においてクラスターの主効果が有意であった[F(2, 202) = 3.29, p < .05; F(2, 200) = 9.03, p < .001]。ネガティブ対処方略をとる傾向は「ママ友パーソナリティ関連トラブル群」と「多様トラブル群」が「子ども関連トラブル群」よりも高いこと、ママ友関係への防衛的考え方は、「多様トラブル群」において他の2群よりも高いことが示された。④ママ友関係において経験される対人葛藤は3つに類型化された。本研究において投入した自己関連付け傾向は対人葛藤の類型には関連を持たないことが示された。多様なトラブルを経験している人はママ友との深い関係を避けようとする防衛的傾向が高いこと、ママ友本人の性格に起因したトラブルや悩みがある人は、その悩みに対して関係を回避したり崩壊させたりするネガティブな対処方略を取りやすいことが示された。

(8) まとめ

一連の研究から以下のことが明らかになった。ママ友関係に対する内発的な動機づけは、ママ友関係の深さ（開示的態度）、広さ（ママ友の数）に強い影響を与えることが示された。誰かと親しくなりたいという動機や友人関係に価値をおくことによって、開示的な態度につながり、多くの友人と付き合うことになる。一方、外発的傾向は相対的に影響が弱く、ママ友関係において“外発的”な動機は少ないのではないかと考えられる。

ママ友への役割期待の検討では、「自律性」「類似性」「支援性」の3つの因子が得られ、ママ友関係では「支援性」への期待が高いことが示された。また友人への役割行動期待では、女子大生の友人関係とママ友関係とで継続性、同型性が示唆された。

内的要因との関連では、成人男性の友人関係、成人女性のママ友関係、女性のママ友以外の友人関係を比較したとき、ママ友関係におけるサポート希求の高さが特徴であった。また子どもが未就学の場合のママ友関係では、外発的動機づけ傾向が高いほど主観幸福感が低い傾向も示された。

ママ友関係における悩みの類型では、「子ども関連トラブル群」「ママ友パーソナリティ関連トラブル群」「多様トラブル群」の3群が得られ、多様なトラブルを経験している人はママ友との深い関係を避けようとする防衛的傾向が高いこと、ママ友本人の性格に起因したトラブルや悩みがある人は、その悩みに対して関係を回避したり崩壊させたりするネガティブな対処方略を取りやすいことが示された。

引き続き、ママ友関係の葛藤生起と関連す

る諸要因について検討する予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

①ママ友という対人関係 中山満子 地域保健 査読なし 2011年3月号, 52-55 (2011年3月)

〔学会発表〕（計9件）

①ママ友関係における対人葛藤の類型化：友人関係への考え方・対処方略との関連の検討 中山満子・池田曜子 日本発達心理学会第23回大会 査読無(2012年3月9日 名古屋)

②Individual differences in friendship in adulthood. Michiko Nakayama, Proc of Conference of International Society of Individual Differences. 査読あり(2011年7月27日 London)

③成人期の友人関係と主観的幸福感：成人男女の比較 中山満子・池田曜子 日本発達心理学会第22回大会 査読無(2011年3月27日 東京)

④友人関係への考え方と自己観が役割行動期待に及ぼす影響：大学生と成人の比較 中山満子・池田曜子 日本パーソナリティ心理学会第19回大会 査読無 (2010年10月10日 東京)

⑤Friendship motivation and role behavior expectation. Michiko Nakayama & Yuri Kuninori, Proc of 27th International Congress of Applied Psychology 査読あり(2010年7月13日 Melbourne)

⑥ママ友関係における役割行動期待：女子大生の友人関係との比較 中山満子・池田曜子・東村知子・野村晴夫 日本発達心理学会第21回大会 査読無(2010年3月26日 神戸)

⑦ママ友関係のとらえ方と関係維持：面接調査による検討 池田曜子・中山満子 日本発達心理学会第21回大会 査読無(2010年3月26日 神戸)

⑧ママ友関係における役割行動期待：親密度・つきあい方との関連 中山満子・池田曜子・東村知子・野村晴夫 日本パーソナリティ心理学会第18回大会 査読無 (2009年11月29日 倉敷)

⑨ママ友関係における役割行動期待：尺度の検討 中山満子・池田曜子・東村知子・野村晴夫 関西心理学会第121回大会 査読無 (2009年11月15日 大阪)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中山 満子 (NAKAYAMA MICHIKO)

奈良女子大学・文学部・教授

研究者番号：30235692

(2)研究分担者

野村 晴夫 (NOMURA HARUO)

大阪大学・大学院人間科学研究科・准教授

研究者番号：20361595

池田 曜子 (IKEDA YOUKO)

奈良女子大学・大学院人間文化研究科・博士

研究員

研究者番号：90523837